

抽出児と教材の関係に着目した授業分析

教育デザインコース社会科領域

井上 弘毅, 大串 優菜, 塩澤 嵩, 志田 拓哉, 平井龍太郎
堀内 友博, 丸山 英里, 吉村 直介, 凌霄, 鄧 婉瑩, 山口 満

1. 目的

「地方自治」という、抽象的な理解に終始しがちである学習内容を、生徒たちの通う高校の地元開催のイベント「戸塚ゴスペルコンサート」の実施過程などを通してより具体的に考えさせる。数あるイベントの中でも「ゴスペル」を選択したのは、生徒たちが普通科音楽コースの生徒たちであることや、昨年度ここに参加した生徒がいることなどからこのイベントが生徒たちにとって身近であると授業者が判断したためである。

また、普段の授業において生徒全員の言動を丁寧に追いながら指導を進める機会はあまりないので、一つの単元を通して1人の生徒に焦点を当てて授業を通しての変化や気づきなどを調査するために教室内に複数の研究生を配置して各生徒の観察を試みる。

2. 方法

対象クラスの中から抽出児を決定し、対象抽出児一人に対し一人の観察者が付き授業中の様子を3時間にわたり観察した。ポスター報告においては、数名の抽出児の中から、特に授業者（山口）が吹奏楽部在籍のYという生徒を選択し、この生徒についての報告を中心に行った。

報告は、

- ・なぜこの抽出児を選んだか
- ・(抽出児は) 実行委員会をどうとらえたか
- ・ゴスペルコンサートをどうとらえたか
- ・地方自治体とのかかわりについて

の四つの視点から行った。

3. 結果

本研究では、抽象的な語句による説明に終始して

しまいがちな地方自治の学習において、生徒の思考を深めるために具体的な事例を教材とした学習を試みた。Yについてみれば、その狙いは一見逆効果であったように見受けられた。Yは1時間目の授業においては自身の音楽活動経験と知識を「コンサート」に結びつけることができず、単なる言葉上での理解に終わってしまった。そこで2時間目は、より自らの体験に意識を向けさせる授業展開を目指した。すると、提出されたワークシートへの記述はたった一言であったが、観察者による報告ではYは自らの知識と経験に結びつけ当事者の立場側からの発言を織り交ぜながら問題に対して思考する様子が散見された。自らの体験に意識を向けさせる場を設定したことが、Yの思考の深まりに影響したと考えられる。

4. 考察

研究を通して、音楽に関する事例をもとにした教材はYにとって、吹奏楽部での活動を手掛かりに「地方自治」について思考を深めていく手立てとして有効であった。また、授業者も学校生活の中で吹奏楽部の活動に触れていたため、生徒の思考を追う際に比較的確からしい推察を行うことができた。そのため生徒の体験などによって得られた実感に触れることができる今回のような具体的な教材は、生徒たちの思考する場面を設定することによって物事と経験等を関連付け、社会的事象に対する理解とその課題解決に向けて思考を深めることを促すことができたと考えられる。

また、そうした生徒たちの言動や感情の機微を細かく丁寧に追えたことは、観察者を置いたことによる成果であると考えられる。